

情熱こそ実践の生命

上 廣 榮 治

二十世紀の終わり頃、某私立大学に新設された湘南藤沢キャンパスは、わが国における大学改革の先鞭べんをつけたことでよく知られています。

このキャンパスが行なった改革とは、コンピュータなどの情報通信機器の徹底的な活用なのですが、私がそれよりもっと興味をひかれたのは、その独特の学びのスタイルでした。

高校を卒業してキャンパスに通い始めたばかりの学生たちが、いきなり自分が面白いと思う研究プロジェクトに参加してしまう、いわゆる「プロジェクト中心教育」を採用したのです。

ここでは従来の大学のように、興味のあるなしにかかわらず既定の科目を勉強させられるわけではありません。「自分が好きなこと」「面白いと思ったこと」を学ぶのです。当然、楽しくないはずがありません。できるかぎりの時間を研究にあてたいと思い、成果も容易に上がることでしよう。

しかしこれは、別に新しい発想というわけではありません。もともと大学は、学生が自分の学びたいことを学ぶ場であったのです。しかし、そのためには、まず基礎知識を学ぶことが不可欠でした。そこ

で、どの大学でも歴史を経る中で、さまざまな仕組みができあがり、自発的な研究にたどりつくまでに、基礎知識を習得する段階、研究室で指導を受ける段階などの階梯かいていを経なければならなくなりました。そのため、自分のやりたい研究の大方は大学院に進んでからということになってしまったのです。

ところが、このキャンパスでは、新入生のときから研究プロジェクトに参加させます。なぜなら、好きな研究をしながらでも基礎知識を学ぶことはできるし、なによりも、自分が興味を持っていることのためなら、基礎の勉強も楽しくでき、また効果も上がると考えたのです。

効果は抜群でした。高校時代に数学が嫌いだった学生も、自分が興味を持って参加したプロジェクトのために数学が必要だとすれば、ひと夏でその知識を吸収してしまうというのです。

「教育で一番重要なのはモチベーション（動機付け、学習意欲を起させること）です。試験のためにいやいや勉強したことは、試験が終わるとみんな忘れてしまいます。好きなことを達成するための必要な勉強であれば、よく身につくし苦にもなりません」。同キャンパスの先生は、学報でそう語っています。たしかに、現在の教育現場の荒廃の大きな要因の一つは、生徒たちが学ぶことに情熱を失っている点にあると思われます。たとえ試験のための勉強であっても、その試験に合格することで明るい未来が開けるならば、なんとか学びの情熱もつなぎとめることはできるでしょう。

しかし最近の若者たちの間には、勉強して一流大学に進学し、一流企業に就職したからといって、何程のこともない、少しも仕合わせの実現には結びつかないという閉塞感が蔓延まんえんしているのです。

そうした閉塞感を打ち破り、学生に学びへの情熱を呼び覚まそうとしたのが、このプロジェクト中心教育だったと思います。そして私は、この「教育で最も重要なのは学ぶことへの情熱だ」という着眼こそ、活性化が課題になっているわが会も、大いに学ぶべきところがあると感じたのです。

そもそも、わが会の会友はみな「より善い生活」を実現したいという、旺盛な情熱を持っていたはず
です。現状の生活に疑問を感じ、それを改めて「より善い生活」を実現し、仕合わせになろうとして、
自発的に実践の日々を選んだのです。その意味で皆さんは「情熱」ということに関しては、申し分がな
い方々ばかりのはずです。

しかも、わが会が提唱する実践は、このキャンパスの新入生がいきなり研究プロジェクトに参加でき
るのと同様に、「より善い生活」を目指したその瞬間から、「自ら望んだ」実践プロジェクトに「喜びを
もって」参加できるのです。当然、実践の実も上がります。その結果、仕合わせと上機嫌を獲得し、家
族や周囲に善き影響を及ぼすことになるのです。そうした事例は無数といってよいほどありました。

ところが近年、はたしてこの人は、本当に倫理の実践に情熱を持っているのだろうか。実践に邁進す
ることを本当に楽しいと思っているのだろうか。そんな疑問にとらわれることが少なくないのです。

もし、実践に強い情熱を持ち、実践の日々を楽しんでいるのであれば、朝起会も普及も日々の実践も、
最高の喜びであるはず。自分が好きなこと、望んだことを、今実現しているのです。とすれば、人
生にこれ以上の喜びはないでしょう。

しかし反対に、望んでいないことを強制されるほど憂鬱ゆううつなことはありません。もしも皆さんが、倫理
の実践に情熱を失い、仕方なしに参加しているのだとしたら、どんな実践も辛く厳しいものになるでし
ょう。実践は自らが望んだものであってはじめて、喜ばしく、やり甲斐のあるものとなるのです。

ではなぜ、せつかくより善い人生の実現を希望して実践を始めた会友が、仕合わせになろうという情
熱を失うのでしょうか。仕合わせにならないはずはないのにです。

かつて、学生が自ら望む研究をする場であった大学が、仕方なしに勉強しなければならない場になっ

てしまっているのと同様のことが、わが会にも生じているのではないかと心配されるのです。

「これこれの実践をしなければいけません」「これこれをしてはいけません」「上に対してはハイですよ」……、そんな一方的な指導が行なわれているところもあると聞きました。指導の内容そのものが間違っているというわけではありません。しかし、実践とは、本人が望んで行なってはじめて真の実践でありうるのだという、とても大切な一事が、忘れられているのではないかと気にかかります。

指導され、強制されて、その通りに行なうことができる従順な人、優等生的な方もたくさんいらっしゃるはずです。しかし、そうした方たちの実践は、自ら望んで行なわれる実践に比べて、どうしてもひ弱なもの、実践の実が上がりにくいものになってしまいます。また、せっかくの実践の喜びも、それほど大きなものではありません。一つ間違えば、仕方なしの、実践ともいえない実践になりかねません。

会友のなかで真の実践者といえる方はみな、実践が好きで好きでたまらない方たちなのです。自ら望んで好きなことを行なっているのです。だからこそ彼らは仕合わせで、常に上機嫌でいられるのです。もし、わが会の活性化という課題を考えるなら、まさにこの点、実践とは自ら望んでの実践であってはじめて、真の実践でありうる、ということを再認識することから始めなければなりません。

わが会の歴史はすでに半世紀を超え、数々の仕合わせの実現の実を上げてきました。しかし同時に、硬直した「これこれでなければならぬ」という教条主義の澱^{おち}も沈殿し始めているのかもしれない。歴史を積み重ねる間に、会場ごとの慣習や個性が強固になって、新しく会に参加される方たちの望みや希望が容易に受け入れられないような事態も生じているのかもしれない。

私たちは、実践への情熱を希薄にしてはいないか。あなたの言葉が他の会友の情熱を削いではいないか。一人ひとりがもう一度、徹底的に、検証していただきたいものであります。